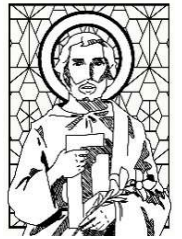




ともに歩む

7号 2026年1月1日 カトリック土崎教会
発行者：篠崎 エジルソン c.tsuchizaki@gmail.com



労働者聖ヨセフ

土崎教会の保護聖人

～神様と、共同体と、日々の暮らしの中で～

【神様の時間で生きる】

私が神学生だった頃、(神学生ではない)大学の同級生たちの使う手帳に驚かされた記憶があります。彼らの手帳はいつも色とりどりのペンでびっしりと書き込まれ、シールや付箋が貼られ、何週間も先まで細かく予定が詰まっていました。空白などあまりなく、まるで手帳そのものが小さな芸術作品のようでした。それに比べて、私の手帳はというと、ほとんど白紙でした。予定がないというより、「手帳を使うほどの予定がない」。そんな日々を過ごしていた私にとって、同級生たちの几帳面さは別世界の光景のようでした。今思えば、あの頃の私は「時間をどう管理するか」よりも、「時間がどう与えられるか」に重心を置いて生きていたように思います。

新しい年が始まると、私たちはつい、人間の時間の流れを意識します。計画、目標、スケジュール、効率。それらは確かに大

切ですが、同時に私たちをせかし、焦らせ、不安を生むこともあります。「このままでいいのだろうか」「計画どおりにいかなかったらどうしよう」という思いが、心の隅に生まれることもあります。

しかし、聖書が語るもう一つの時間があります。それは「神様の時間」＝「カイロス」と呼ばれるものです。私たちが手帳で管理する「クロノス」とは違い、カイロスは「神様が働かれるにふさわしい時」「恵みが満ちる時」を意味します。人間の時間の感覚とは異なる速度で進み、思いがけない瞬間に、思いがけない形で実を結びます。

一年を振り返ると、私たちもこの「神の時間」に触れていることに気づきます。順調に見えない出来事や、予想外の困難、計画が途中で変わってしまったこと。その時は苦しくても、後になって「あの出来事があったからこそ、今がある」と気づく瞬間があります。むしろ人間の計画どおりにいかなかった時のほうが、神の導きが静かに

働いていたことに気づくこともあります。

新しい一年を迎える私たちに必要なのは、ただ計画を立てるだけでなく、神様の時間に心を開くことです。焦りから少し離れ、神のリズムに心を合わせることに。すぐには実を結ばなくても、恵みが少しずつ満ちていく道へと導かれていると信じることです。そして、今日という一日を、神様から与えられた時間として丁寧に生きることです。

新しい年が、神の時間に気づく恵みに満ちた一年となりますように。私たちの歩みが、神のみ手のなかでゆっくりと、しかし確かに実りを育てていきますように。

ハッピーニューイヤー！

【新しい歩みをともに始める ― 教会総会を迎えて】

年の初めに、私たちの教会では総会が開かれます。一年の報告を受け、これからの歩みを話し合うこの機会は、企業のような単なる会議ではなく、キリストの体、共同体としての「分かち合い」と「識別」の時です。

私たちは過ぎ去った一年の中に、神様がどのように働いておられたかを思い起こし、その恵みに感謝するところから始めます。そこには、目に見えて喜ばしい

出来事があれば、静かに進んでいた小さな成長もあるでしょう。どれも、神様が私たちの共同体を支えてくださった証しです。

同時に、総会は未来に向けて心を開く時でもあります。教会はいつの時代も、単に「去年と同じことを続ける場所」ではなく、その時代と地域に生きる人々に寄り添い、光をもたらす使命を担っています。私たちは、これまで大切に受け継いできた信仰の伝統を尊びながら、「時のしるし」を見分ける知恵を求めて歩まなくてはなりません。

私たちの周りの状況は変わり続けています。様々な事情により、生活スタイルが変化、地域社会のつながり方の変化…。その中で、神の愛の証人である私たちがどのように福音を生き、どのように地域の人々とつながっていくのかは、共に祈りながら考え続けるべき大切な課題です。

総会は、そうした問いを前に、共同体の一人ひとりが「神様の望まれる方向はどこか」を探るための場です。私たちの考えや希望を持ち寄りながらも、最終的には神の御旨に耳を傾け、時のしるしを識別し、それに従う心を新たにすることに意味があります。

焦らず、争わず、自分の意見に固執しすぎることもなく、聖霊の導きのもとで互いに耳を傾ける、そのような姿勢は総会そのものを一つの祈りの時間にしてくれます。

どうか今年の総会が、私たち共同体にとって新しい恵みへの入り口となりますように。過去の歩みを感謝とともに受け取り、その上に立ってさらに豊かな未来を築く力を、神様が与えてくださいますように。

そして私たち一人ひとりが、変わりゆく時代の中でも、「ここで神の御旨を生きる」という使命に応えながら、喜びをもって新しい一年を歩み出せますように。

【日本に来て、まもなく 30 年】

今から 30 年前の 2 月、私は母と二人で日本にやって来ました。関西空港に着くと、真冬の冷たい空気が肌にしみて、「本当に地球の反対側まで来たんだな」と静かに実感したことを覚えています。

到着したのは夜遅い時間で、空港にはブローカーの方が迎えに来てくださいました。アパートへ向かう途中、夕食を買うためにコンビニに寄ってもらい、手に取ったのはカレー味のカップラーメンとおにぎりでした。アパートには電気ストーブと布団以外には何もなく、母と二人

でお湯を沸かして並んで食べたあの夜のことを、今でもはっきりと覚えています。カップラーメンの温かさが、冷えた体だけでなく、不安でいっぱいだった心までそっと包み込んでくれました。「おいしいね」と笑い合ったその時間は、日本での大切な最初の思い出です。

この 30 年を振り返ると、まず心に浮かぶのは、多くの方々への感謝です。言葉も文化も十分に分からない中で、出会った人たちの助けや励まし、祈りに支えられて、少しずつ日本での生活と歩みを形づくることができました。出会いを通して、いつも神様の慰めと励ましに触れてきたと感じています。

そして、何よりもこの歩み全体を導いてくださった神様に、心から感謝します。喜びの日だけでなく、不安や孤独の日にも、見えない御手がそっと支えていてくださったことを、今は深く思います。振り返るたびに、すべての出会いと出来事が、神様によって備えられた道であったのだと感じさせられます。

今、ともに歩む教会の皆さんにも、深い感謝をお伝えしたいです。受け入れ、祈り、支え、ときに励まし、ときに指導してくださる皆さんがいるからこそ、司祭として、そして一人の信仰者として歩

み続けることができます。どうかこれから、教え、導き、ともに成長していただければ幸いです。

30年という時間は長いようで、振り返ればあっという間でした。出会い、喜び、戸惑い、学び、そして導き。その一つひとつが、今の私を形づくっています。これからも、この地で与えられる「今日」という一日一日を、神への感謝とともに、そして皆さんとともに歩んでいきたいと思います。

【すべてのいのちを包む母に学ぶ平和】

1月1日は、カトリック教会で「神の母聖マリアの祭日」として祝われます。私たちが新しい年を始める日に、教会は「マリアが神の母である」という信仰の核心を思い起こさせます。聖母マリアは、人類の救い主イエス・キリストをこの世に迎え入れた方であり、「平和の君」を産み、世界に平和をもたらす母でもあります。

「神の母（テオトコス）」という称号は、431年のエフェソ公会議で定められました。これはマリアが「人間イエスの母」であるだけでなく、そのイエスこそ「真の神」であるという信仰の告白でもあります。マリアの母性は、人間の歴

史の中で神が人となる「受肉」の神秘に直結しています。彼女の「はい」という従順な信仰が、神の救いの計画を受け入れ、平和の源であるキリストをこの世にもたらししました。

同じく1月1日は、教皇パウロ六世によって1968年に定められた「世界平和の日」でもあります。教皇は「新しい年を、平和への祈りと希望で始めたい」と呼びかけました。それ以来、毎年この日に教皇は平和に関するメッセージを全世界に発信しています。今年も、暴力や分断、環境破壊など様々な危機に直面する世界において、キリストの平和をどのように築くかが問われています。

平和は単なる戦争の不在ではなく、心と社会の中に神の愛が根づくことです。マリアはその模範です。彼女は沈黙のうちに神の言葉を心に受け入れ、すべての出来事を「心に納めて」（ルカ2章）黙想しました。その姿は、争いではなく、理解と受容のうちに他者と関わる平和の態度を教えてください。

新しい年の始まりに、私たちもマリアとともに祈りましょう。彼女の母のまなざしに学びながら、家庭、社会、そして世界がキリストの平和で包まれるように。